



「守り、繋ぐもの」

福井市明倫中学校 3年 細田 和寛

「お父さんはなぜ、そんなにいろんな国の人と仲良くなれるの？」

僕はある日、たまたまなくなっていたねた。

小学生の頃、僕は父に連れられて、インドネシアなどのアジアの国々を2回訪れている。父は、普通の人
が観光で行くような所ではなく、何時間もジープを走らせて、ジャングルの中の村へ僕を案内した。

そこで見たのは、もう現地の人たちとすっかり友だちになって、楽しそうに話をする父の姿だった。顔の
つくりや言語の異なる外国の人たちと、しっかり人間関係を築いて仕事をする父。しかも、それはその村だ
けではなく、行く先々での光景だった。だから僕は、思わず父に質問をぶつけたのだ。

その答えは思いの外単純だった。

「自分から中へ入って勉強したんだ。」

父の話せる外国語は英語だけだが、机上で覚えるよりも、いろんな国を旅しながら体あたりで使えるよう
にしたのだそうだ。

そして、もう一つ忘れてはならないことを教わった。人として信頼されるには、人間力が、大切だという
ことだ。

「だれだって、ウソをつく人間かどうかは、つき合えばわかるんだからね。それから、相手の立場は、い
つだって感じてあげなくちゃいけない。」

僕は、世界中のいろんな種類の人達との違いを越えて、「相手の立場を感じる」心が人間力であり重要な
のだと思った。

こんな父が若い頃、貧しい地域を旅すると、集まった子供たちにポケットの中身を持っていかれそうに
なったそうだ。そんな悲しい状態を無くせないかと考えた父は、その場しのぎで渡すお金より、教育と仕事
こそ彼らに必要なのだと気がついたそうだ。それは、相手の国の人たちの立場を真剣に考えたからこそその結
論だった。

「自分の力で生きられるのが一番幸せだよ。」

そう言って父は、ジャワ島の村で協力栽培しているメリンジョの畑を見せてくれた。

植え方や育て方の指導から始めて、僕が行った時はまだ植林したてだった苗木も、今では立派に実をつけ
ている。この実は現地加工して付加価値を高め、日本に輸出されるので、村の暮らしはずい分安定したとい
う。もう、焼畑で森を焼く必要もなくなった。現地の植物資源で現地の人たち自身が生きるこうした仕組み
作りの精神が、父の仕事の柱だ。

さらに最近では、日本に留学や研修に来る若い人もいて、彼らに会うと、僕もこの取り組みを引き継いで
いかなければという思いが強くなる。仕事は、現地に根づいて定着してこそ人々の幸せに繋がるのだ。でも、
そうなるためには、インドネシアの人達とパートナーである僕たち、どちらもが次の世代でも強く結びつき、
力を合わせなければならないと思う。

だから僕は、将来も彼らとの信頼関係を守り抜き、次世代に繋げていく努力を続けたい。